

## 家族内の役割およびメタ認知能力が子どもの精神的健康に与える影響

大塚 穂 絵

本研究の目的は、青年期の子どもが家族内で担う役割について再検討すること、受け入れがたい役割期待に従うことと精神的健康の関連、およびその関係における客観視できる能力の調整効果を検討することであった。青年期は、家族関係が再編され、親と子の役割関係が変化する時期である。役割期待に従った行動をすることは、対人関係を形成・維持する上で重要な働きをしており、役割期待に従った行動をすることは肯定的な側面に着目されてきたと言える。一方、受け入れがたい役割期待に従った行動によって、自尊心が低下するという知見もある。役割は相互作用の中で決定されるものであることを踏まえると、役割期待には、受け入れて行っているものと、受け入れがたいが強いられているものとあると言える。したがって、対人関係を維持するために「(受け入れがたい役割であっても)自分がその役割を担う」というコーピングに固着している場合に、精神的健康が脅かされると考えられる。本研究では、コーピングの柔軟性と関連のあるメタ認知を取り上げ、役割期待と精神的健康との関連における調整効果を検討した。

349名の高校生を対象に質問紙調査を実施し、青年期の子どもの役割のあり方を検討するためにクラスター分析を行った。その結果、家族関係を調整する親役割を期待される群、役割期待および行動の程度がいずれも低い群、親に従順である子役割を期待される群が得られた。ここから、青年期の子どもは家庭のみでなく家庭外の様々な関係の中で生きており、親からの精神的な自立に伴い、家庭への関与が薄くなる段階にある可能性が示唆された。また、役割の受け取り方と精神的健康の関連を検討した結果、自分に期待されている役割を肯定的に受け入れる「積極的受け取り」とストレスとの間に有意な負の相関、役割を拒否している「拒否的受け取り」とストレスとの間に有意な正の相関が見られた。この結果は、期待される役割の内容だけでなく、当人がどのように認識しているかということが適応に関連する可能性を示しており、役割の受け取り方に着目する重要性を示した。

さらに、メタ認知能力について、その高さによって自分のおかれている状況や自分に期待されている役割から距離をおくことができ、望まない/受け入れがたい役割であってもストレスに繋がらない側面と、一方でその能力の高さによって、周りからの期待を敏感に感じとってしまい、かえってストレスにつながるという側面の存在が示唆された。今後は、メタ認知能力の高さによる肯定的側面だけでなく、否定的側面も含めた両側面から検討することが必要であると考えられる。